

飛耳長目

通巻190号 令和元年9月1日発行

「開頭」第76号
昭和29年3月5日刊「開頭」三月号通巻第76号

巻頭言

教育界のエネルギー源

森 信二

今日わが教育界において為さねばならぬ事柄の種類は多いと思うが、しかし「そのうちの最大なるものは何か？」と問う人があつたら、一瞬の躊躇もせず、「それは三十一二歳以下の若い人々の間に同志を求めることだ」というであろう。じつさい今や民族のエネルギーの過半に近い分量が、三十一二歳以下の人々に向つて移行しつつあるのである。この一事を明白に洞察しえない人々は、たとえ如何ようなことを言おうが考えようが、それは結局観念の遊戯にすぎない結果となるであろう。いやしくも現実の世界に起つて、何事かを実現しようとする限り、その実現へのエネルギーの所在をまづ考えねばなるまい。そして事は、教育界においても、全く同様である。民族のエネルギーが30歳以下の世代に、その大半が移行しかけていくことは、教育に於ても全くあてはまるのであつて、このことは、現在三十一二歳以下の先生が、半数以上を占めていない学校は、少いことを見ても分るはずである。戦争をたくらむものはまづ何よりも動力源としての油田の争奪に奔命する。同様に教育界に於て、今後何事かをしようと考える者は、如何にして二十代の潑刺たる生命のエネルギー源を同志として獲得するかに千辛万苦すべきである。もしこうした洞察と実践のできない程度の人間が教育愛などと言つたとしても、多分言葉の方から逃げ出すことであろう。

一 島国における深憂

森 信二

一

民族の現状に関して、現在わたくしの最も深憂している問題は何かというに、それは一言でいえば民衆における「分裂症的傾向」と言つてよいかと思う。もちろんわれらの民族は、敗戦以来、七年もの永い間、敵国の占領下におかれて来、そして、それがようやく終つたかと思ふと、独立とはほとんど名目にすぎず、各種の協定契約が、協定契約とは全く名ばかりで、その実内容においては、結局一種の事実的強制に近い様式で、米国の勢力下に新たなる隷属を開始した現状においては、民族生活のいかなる切断面をとつてみても、そこに民族の現在並に将来のために憂慮すべき事態は到る処見られぬ処はないはずである。

だが、それにも拘らず私が、上に託したように、現在われらの民族について最も憂慮している事柄といへば、やはり前述のように民族における「分裂症的傾向」といわざるをえない。何となれば、私の考えによれば、現在われらの民族におけるあらゆる憂慮すべき事柄のすべてが、結局その根本原因としてここに述べようとしている民族における分裂症的傾向に基因すると思われるからである。即ちわが国の敗戦後、否、厳密には名目的独立後、わが国に起りつゝある民族の悲劇とも称すべきもろもろの憂慮すべきことからは、結局民族におけるこの分裂症的傾向がその根本原因をなすのであり、それが、いろいろの領域において、種々形態をかえてあらわれているにすぎぬと思われるからである。しかも私の考えによれば、このような民族における分裂症的傾向は、そのよつてきたる処深くして遠く、結局は、われらの民族がこの島国に居住している処に、そも最終的根因があると思われるのである。前号において私が「島国性の宿命」と題する一文をかゝげたのは、もともとこの点を究明してみたかったのであるが、続面の都合上ホンの序論だけに終つたので、改めてここにこの問題をとり上げることにしたのである。

二

私がこゝで民族における「分裂症的傾向」と呼ぶのは、

これを端的にいえば、いわゆるインテリの思想上国民大衆の考えとの間に巨大なギャップがあって、それがあらゆる場合に、民族としての大きなマイナスになっている現象をさしているのである。

この問題をさらにらきつめてゆくと、いわゆる総合雑誌と呼ばれるようなものにせられて論文なり主張なりと、現実の政治の行われ方との差があまりにもひどすぎる点を言おうとしているのである。私は外国の雑誌をみていないので、この点がヨーロッパ諸国なり又はアメリカなどで、どういう風になっているかを、つまびらかにしえないが、しかし私の考えるところでは、こうした傾向が、わが国ほどにひどく甚しい処は、おそらく外にはなからうかと思うのである。話をハツキリするため、私はこゝに一つの実例をあげてみよう。

それは明けて一昨年、わが国がとにかくにその永い占領期間に終りをつけて「独立」するという直前のことである。近畿の某大学の文学部の教官諸氏のまねきで、ニパーの弟子である武田清子氏が来られ、一席座談会がひらかれるとのことで、私も招かれてその席末に加わったことがある。その時基地の問題がやかましく論じられて、それぞれ各自の意見をのべることになったが、武田氏はもちろん、他の人々もみな「絶対反対」ということであつた。やがて順番が私の処へまわってきた。そこで私は言ったのである。

「もちろん私も希望や願望としては、絶対反対と言いたい処ですが、唯わたくしはリアリストですから、単なる希望や願望でなくて、実現可能なぎりぎりの線を打ち出さねばならぬと思います。そうした立場から考える」と無條件降伏して七年もの永い間、敵国の占領下にあつたものが、しかもこのような厳しい国際情勢下にあつては、独立するとはいつても、半ばは名目的であり、随つて全然基地をもうけさせぬなどいうことの通ろうはずはないと思うのです。それで現実問題としては、まづ場処を何処と何処というふうに限定すること、並びに期限を何時までと限定することが必要ではないかと思いま

す。もちろん外交的折衝のことですから、そこに多少のかけ引きのいることは当然でしょうが、初めから絶対反対というだけでは、言うのは勿論さしつかえないわけですが、しかし私には多分現実の実現性のない主張ではないかと思われるのですが云々」その場で私の述べた考えは大体このようなものであつた。

三

然るにその後の現実の進展をみると、現在基地の教は七百何十という言語道断なぼう大な数に上っており、期限の点についても、全く「無期限」だとのことである。フィリピンでさえ、基地は九十九ヶ年という期限がついているのに、わが国の場合には全然「無期限」だということである。九十九ヶ年というのは、周知のように外交上の慣例では「永久」ということであり、しかもそれが最近までアメリカ領だったフィリピンのことだと思ふとき、米国がわが国を植民地視している程度は、旧アメリカ領たりしフィリピン以上だということが、

何よりも明了にうかゞわれるのである。そこで私の思うことは、かつて「基地絶対反対」をとなえた人々は、この現状にたいして、一体どのような感慨をもつて居られるだろうかと言ふことである。言いかえればこのような結果に対してどのような責任感をいっているだろうかということである。

なる程それらの人々は……こゝにそれらの人々というのは、主として総合雑誌などに執筆しているいわゆる「進歩主義思想家」をさしているのであるが……このような事態にたいして深く憂慮しておるようであり、そのことはその後基地周辺の子らに及ぼす教育上の悪影響に対して、猛烈な基地撤去要求として現われていることの上にも何われる。

だが私がこゝで言おうとしているのは、そうしたことはなくて、前に絶対反対をとなえたことと、ふたを開けてみたら、基地七百何十、しかも全くの「無期限」という事実に対して、果してどういふ責任を感じているだろうかということである。

人によつては、このような事はいわなくても、その後基地反対運動の実践によつて十分だと考える人々もあるであらう。私自身にもそういう人々の気持ちに分らぬわけではない。だがしかし私はそこに問題があると思ふ。そしてそれが民族の最も深い病根といつてもよいものではないかと思ふのである。

四

こゝで私が問題というのは、それらの人々が、「自分らは絶対反対をとなえたにも拘らず、反動勢力が、こんなだらしのない不屈至極なことにしてしまつたのだ！という風に、結果の責任をたゞ保守反動勢力のみに、一偏到的になすりつけて、自分たちの主張のうちにも、何らかの程度において誤謬があつたのではないか？ということへの反省を欠いたまゝではたしてよいかどうかという問題である。

私はわが民族における保守、反動的な根は、遺憾ながら予想以上に深い根ざしをもつていてはないかと考えている者である。これは他のことばで言えば、われらの民族における封建的官僚的なるものの根ざしは、綜合確誌などに書く人々の考えているより遙かに深いものではないかと考えているのである。それが如何なる点に原因するかということの分析は実に重大だと思ふが、それは別の機会にゆずるとして、とにかく私には、いわゆる進歩的思想家と呼ばれる人々には、まだ十分に深く民族の対建性の根深さが分つていないのではないかという気がしてならないのである。

現に敗戦後のわが国において、ある意味では最も大きな問題となつた内灘で、事件が一段落した後、中山村長が辞職し、その後任村長を選挙した処、保守派への投票が七割何分をしめ、それに対して清水幾太郎氏が、あれだけの大騒ぎをしたあげく、尚村民がそのような投票をしたことに対して、びっくりして村民を「何というバカヤロウかと思つた云々」の旨を某誌の上でのべていられるが、しかしこれは清水氏が東京育ちのインテリ秀才の

ために、農民の実情がよく分つていられないせいで、私などのような田舎育ちの土臭い人間にとつては、少しも意外ではないのである。このことは例えば杉明氏平氏の「ノリソダ騒動記」ひとつ読んで見当はつくことである。

五

私がこゝで問題としたのは、このような民族の根深い封建性については、あくまでこれを引き抜かねばならぬが、しかしこれは今後相当長期間にわたる民族の努力：とくに教育的努力にまつべきものであつて、現実の責任をもつべき発言としては、そうした将来を夢みることなく、どこ迄も民族の現状を把握した上に立つての立言、主張でなければならぬと思ふのである。然るに私の見るところでは、一般にわが国のインテリ思想家に共通する病弊は、前述のように、国民の一人ひとりの心の奥に巢喰つている根深い封建性を洞案しないで、甘い公式論的な立場に立ち、そのために、一般国民大衆の心を引きつけることができず、保守反動勢力は、そのすき間に乘じて殆んど際限なきまでの屈辱的政策をなしてあえて恥ずるなきが如くである。即ちかれらの眼中には、綜合雑誌上の論文の主張などは、国民の心理に根ざさぬものとして一蹴してかえりみないのであろう。この点は、アメリカ人からみると、如何にも不思議な現象であるらしく、彼らは最初のほどは、自国流に判断して、わが国のインテリ進歩主義思想家たちのラディカルな主張を深く気にしていたようであるが、時のたつと共に、それが必ずしも深く国民の心理に根ざした代表的意味をもたないことが次第に分つてきたため、これら思想家との関係を保守反動勢力を露骨に恫喝して、なさざる処なき傍若無人ぶりを發揮しているのである。即ちこれを一言にして、民族におけるこのような知識分子と、保守反動との極限的な分裂症状をもつての俤いとして、全く為さざる処なき暴状を發揮しているのである。

こうした惨憺たる事態に対して、いわゆる進歩主義者

たちが、いたずらに公式論をふり廻して、たゞ保守反動勢力のだらしなさのみを……事実それは全く言語道断という外ないものであるが、それにも拘らずそれに対して、唯ののしるのみではダメではないかと思ふのである。即ちいわゆる進歩主義者たちが、民衆の内なる対建的なるものゝ根深さに対する自己の洞察の不足不明から結果する事態の深刻さについて、自らもまたその負うべき責任を痛感するようでなければ、現実には、本質的には一歩も前進せぬのではないかと憂慮せられる。否時には退歩の危険さえないと言ひ難いように思われるのである。この点は過去数年間にわたる日教組の中央幹部についても全く同様のことが言えると思ふが、紙面の都合上こゝにはふれないでおく。何れにしても民族の指導的立場に立つ人々は結果の現実に対して深き責任感を持ち、自らの言動に対して常に反省を怠つてはなるまいと思ふのである。

この頃の発し

森信三

もし人あつて私に対し「このごろの楽しみはどんなことですか？」と尋ねられたとしたら、私は多分次のような事柄を以て答えるであらう。

そのひとつは学生との関係からくるものである。正直に言つて、この点に対しては、私は就任以来非常に心を使つてきた。というとならぬ妙にきこえるかも知れないが、しかし何分にも年齢が齢なので、私のような初老の境に入りつゝある人間の言うことが、現在の若い人々に、果してどの程度に受けいられるかというところは、最初から大きな問題であつた。けれど教師として、対象たる学生や生徒の心境を洞察しえないで、その日その日を過すということほど私は「悲惨なる罪悪」はないと思ふからであらう。しかも現実の私は、そうした思念の如何に拘らず、年齢的に、時代に対する感覚を欠除していると言わねばならぬのだから……。実際今日、時代感覚という点では、

小中学の先生の場合で、大体三十一二辺に、大きな溝があるように思う。また学者、思想家の場合には……この方は前者ほどハツキリとは分らないが、しかし大体四五歳を以つて一段的には、時代感覚に対する新旧を分つことができるではないかと思ふのである。

そもそも今日のよう激しい時代には、その時代把握の基盤をなすものは、時代感覚であつて、それは畢竟「時代に対する感受性」ということに外ならない。随つてこの時代感覚というものは、書物を読んだり頭で考えたりすることも勿論必要ではあるが、しかしより基礎的基盤的なものは、皮膚を通して感受するものの方である。私なども、時代感覚については、読み物などはつとめて注意し、努力しているつもりではあつても、肝心の皮膚を通して感受するものとなると、次第に硬ばりゆく自らの皮膚感覚を如何ともし難い感がするのである。

ところが就任以来、丸一ヶ年近い昨今になつて、次第に分つてきたことは、今後怠けさせなければどうにかマア落第だけはせずにはすむらしいということである。つまり私が考へたり言つたりすることが、学生たちのもつていゝる生命の波長と勿論同じではないけれど、どうにか辛うじて、同一振幅圏内にあるらしいということが分り出してきたのである。同時にそれによつて、多少心の安らぎをうると共に、講義に出かけることが、実に楽しくなつてきたのである。実際人間は正直なものである。

○ 授業が楽しいという点では、あるいは私のこれまでの教師生活のうちでも、現在が「一ばん楽しい」と言えるかも知れない。私の今日までの教師生活のうち多少ともまとまつたものとしては、大阪の天王寺師範時代と建国大学時代と、それに現在とであるが、それらはそれぞれに趣を異にしたものである。しかしもしそれらのうち、どれが最も楽しいかという点で、どうも現在ではないかと思ふ。

天王寺師範時代は何と云つても師範という制約の下にあつたために、生徒の教養においてどうしても未だしき処あるを免れなかつたし、また建国大学は、あのような特殊な学校であつたために、私のような者には、すべての

調子がやゝ粗々しい感がした。それらに比べると現在の処は、第一学生のすべてが教師になる人々であり「それにとにかくに新制大学として、旧師範学校に比べるとすべてが自由である。同時にこれらの外にも現学部長塩尻公明氏の人格と思想とが、学園の雰囲気及ぼしている影響は、預想以上に大きいのではないかと私は見ている。

令和1年9月1日発行

さてこのような具合で、学校にゆくのが発しくなってきたという事のうちには、以上のべたことの外に、今ひとつ、最近に至って講義の様式が自分なりに一応見当がつき出したという点も大いにあると言つてよからう。実は講義の様式という点については、私は永い間迷つてきた人間である。一体どういやり方が教える側にとつても、また教えられる側にとつても良いやり方であるか？ということには、じつさい私は永い間苦しみに悩んでいたのである。

通巻190号

現に自分自身が生徒として、また学生として選んだ立場から言つて、私は高師では西、福島両先生に大学では西田、田辺両博士というような、日本の学界のもつた特級ともいふべき方々にお習ひしたのであるが、いざ自分が教えるという立場に立つて、どなたの教え方によるかということになると、「ではあの法式で」と言いうるものはないのである。

目録 (ひじちよ)

昨年の前期……四月から九月まで……には私は「教師論」をノートで、そして「教育原理」の方は、「指導要領」の批判的読とというやり方でやつてみた。つまり前者は一字一句学生に筆記させる処の普通のノート様式であり、後者は、読本とは名のみで、ほとんど全くのフリー・トリーディングといった様式であった。即ち全然正反對な両極の様式をとつてみたのである。

ところが後学期となると、私は「教育原理」を原稿を書いて行つて、純ノート様式でやつてみたのであるが、次第に分つてきたことは、そうしたやり方が、当の学生自身にとつては全く機械的な労役作業であつて、なるほど後で読み返してみれば、判るとは言え、もし読み返えさなかつたら……自分の経験からしても、試験になる

までは、まずはしない学生の方が多かろうと思われるので、どうもこの様式も眞に教育的ではないと思うようになって来たのである。

ところがそのうも或る動機からして私は、講義の様式というものについて、根本的に考え直してみなければならなくなったのであり、そしてそのあげく私の到達した結論は、大体次のようなものとなったのである。それは結論的に言えば、教室での講義というものは、大体著述と講演との中間をなすものではあるまいかということへの認識であつた。即ち教室での講義は、それが体系的組織的な知識の展開ではあるとしても、私が後学期にしかけたような、やがて著述として出版するつもりで書かれたような原稿を読まれたのでは……もちろんこれは何も私一人に限つたわけではなく、多くの人々のやつてきたことではあるが……学生としてはたまつたものではないということが次第にハッキリと分つてきたのである。

即ち講義というものは演習などを別にすれば、その大部分が教師の音声を紹介して行われるもので、直接視覚に訴えるものではない。ところが論理的体系的な表現というものは、本来視覚にうつつたえらるべきものであつて、それを音声を通して読み上げて筆記させられてはたまらぬわけである。

だが、さればと言つて講義は単なる講演と違つて、そこに知識の体系的組織的な展開がなくてはならぬ。しかもそれが学年とか、一年の永きにわたつて連続し持続して行われなければならないのである。

かくして私の到達した結論は、講義というものは、著述のように唯ロゴスのみでよいと言えぬと共に、また講演のように主としてパトスに訴えれば、一応事がすむというものでもなく、ロゴスとパトスとの総合態でなければならぬということがやつと分るようになったのである。そしてこのロゴスとパトスとの結合態とは、如実に「一応秩序を立てつつ、しかも自由に語る講述様式」であることが分つてきたのである。そのために、学期の途中ゆえ、初めはどうかと迷わぬでもなかつたが、とう

とう一月から上述のような一種のフリー・トリーディング様式に変更した処、学生の方でもこの方を遙かに歓迎してくれたようである。即ちこの様式であれば、こちらもノートの原稿を読むのと違い、直接学生に向つて訴える端的性があり、また注意して、処々間合いを作りながら話したり、また時折りは同一趣意の事柄を、ことばを変えて言い直したりするので、学生の方でも自己の主体性をたまちながらゆとりをもつて大体の要領を書き記してゆけるわけである。

ただ最後にこの様式によるには、教材の内容がよほどよく身につけていないと出来ないということである。即ち用意としてはホンの簡条書き的な紙片にメモを記した程度のもので、二時間近い間を話すのであるから、わが身に融け込んでいない内容ではどうにもならぬわけである。どうせ物事には如何なる事にも長短はあるわけであるが、しかしとにかくに一応自身の肌合つた講義様式に到達したことは、何といつても最近の最もうれしいことの一つといつてよい。(昭和29年3月5日刊「開眼」三月号通巻第76号)

あとがきに替えて

森信三先生の仰有る「分裂症的傾向」は今日もなお、一向も変わらずにはびこっている。この文章を今新聞にそのまま載せても全然違和感はないであろう。ほんとうに深憂に堪えないと愚生も共感を覚える。また当時先生が、授業の仕方でお悩みになつたことが詳しく述べられているが、これは現代も道德の授業の仕方等で参考になるだろう。(30日二纂)

〒633-0003
桜井市朝倉台東2-538-89
電話 0744-4513422
Email: hji3@ken.jp
http://web1.ken.jp/syushn